

嘘と孤独とテクノロジー

知の巨人に聞く

エドワード・O・ウィルソン Edward O. Wilson

ティモシー・スナイダー Timothy Snyder

ダニエル・C・デネット Daniel C. Dennett

スティーブン・ピンカー Steven Pinker

ノーム・チョムスキー Noam Chomsky

吉成真由美 インタビュー・編 Yoshinari Mayumi

目次

まえがき 「利己性」「利他性」「社会性」

第1章

エドワード・O・ウィルソン

「人類は石器時代の感情と、神のようなテクノロジーをもっている」

「真社会性」——「真社会性」を示す生物の数が少ない理由／グループ内では利己的な

個体が勝つが、グループ同士の競争では利他的なグループが勝つ／アリの力

「利己性」と「利他性」の相克——「血縁選択」vs「群選択」／「群れvs群れ」の競争では
利他性が選択される

「意図的進化」の時代——部族主義が宗教を生んだのか／人類は石器時代の感情と、
中世の組織と、神のようなテクノロジーをもっている／遺伝的未來を自らの手
で決定していく

種の多様性——多様性が高いほど、地球はよりよく維持されていく／虫たちの黙示録

科学者の姿勢——STEM教育は間違いだ／フィールドワークこそ力となる／文科

系と理科系の融合／二大論争の顛末／延命研究について

第2章

テイモシー・スナイダー

テクノロジーとロシアとファシズムの関係

テクノロジーとロシアとファシズムの関係——格差問題は正がファシズムに

つながる理由／ポピュリズムは「法」や「体制」をなし崩しにする

ロシアと中国問題——ロシアは「前近代的」国家だ／ロシアにとっての本当の脅威

は中国だ

「テクノユートピア」と民主主義——嘘は、人々から抵抗力を奪う／完全な「透明

さ」とは全体主義のこと／インターネットはスパイの温床になる

最悪の暴力と「良い不完全」——市民でなくなった時に、最悪の悲劇が起こる／

「われわれvs彼ら」という対立構図を避けよう／国家はサイエンスに投資すべ

きだ／民主主義は時間を稼ぐ

第3章

暴政を避けるためのレッスン——付度による服従をするな／組織や制度を守れ／相手の目を見て世間話をせよ／愛国者は歓迎するが、国粹主義者は願わぬ／歴史を学ぶことが未来を生み、民主主義を支える

ダニエル・C・デネット

世界は「理解していないけれど能力がある」現象で回っている

科学と哲学の関係——哲学者がサイエンスの仮説を立てる／サイエンスなしの哲学はもはや存在しない

意識とは何か——「意識」はどこに存在するのか／人間の脳はシロアリの集団のようなもの／ロボットは奴隷であるべき／「理解していないけれど能力がある」との重要性／ミミズにも「意識」はあるのか／「自由意志」とはセルフコントロールのこと／脳内で「意識」を特定できるのか／「ハードプロブレム」

宗教と進化——宗教の衰退／「家庭」とは、そこに行ったら必ず受け入れてくれるところ／人間の本質は部族主義

言語の獲得について——言語の出現と「ミーム」進化——チョムスキーは間違っている／人間は「言語獲得器官」をもって生まれてくるのか

ホモサピエンスの未来——テクノロジの不都合な真実——「秘密」は大事だ／情報は誰がコントロールしているのか／「進化」は人間の知恵よりはるかに優れている

人生の意味と教育、そして将来の展望——意味の存在しない世界に意味を生み出す／子どもを孤立させるのは残酷だ／教育において大事なことは実習、実務／「信頼」を崩壊させないことが民主主義を支える

第4章

ステイバーン・ピンカー
なぜ人類の暴力は減ってきたのか

暴力と国家——人間の本性の変化ではなく、体制の変化が暴力を減らしてきた／核兵器の危険性は抑止力を凌駕する／自由と統制——民主主義はパーフェクトにはなりえない／「一民族一国家」はもはや無理／「世界政府」は可能か／心理的攻撃は肉体的暴力よりはるかにマシだ／ニュースは「事件」をカバーして「傾向」をカバーしない

21世紀の啓蒙主義——「理性」「科学」「ヒューマニズム」「進歩」こそが啓蒙の本質／

「理性は情熱の奴隷であるべき」なのか／なぜフリースピーチが大切なのか

人間の本性と意識について——言語とは「思考を信号に変換する」能力／男の攻撃性
性とビデオゲームの効用／男女の性欲の差／「自由意志」は脳の神経回路として存在する

ホモサピエンスの未来——カリスマ性のあるリーダーには注意せよ／分業して真実を追求していこう／嘘を見抜く「クリティカル思考」と「知識」が大事／現在はインターネットがもたらす混乱への「対応時期」／テクノロジは孤独化を加速させるか／「他人の心を推測する能力」が宗教を生んだ／人生の意味とメッセージ

第5章 ノーム・チヨムスキー

新自由主義はファシズムを招く

ファシズムに向かっているのか——「緩和政策」が多大な格差を引き起こした／ブラジルで起こった最悪の選択——ソーシャルメディアによるプロパガンダの拡散／誤った怒りの矛先／グローバル大企業を誰がコントロールするのか

中東問題——なぜ米ドルが強いのか／中東に「核兵器フリーズゾーン」が実現しない本
当の理由

日韓問題と中国の台頭——争い続けていたら共倒れになるという認識が和解の力
ギとなる／医薬に関する「知的財産権」の侵害について／トランプ政権と人類
史上最悪の共和党

合意の形成——恐怖を煽って合意を形成する／プロパガンダの罠にはまらない方法
未来への展望——嘘の拡散と人々の細分化／テクノロジーは単なる道具にすぎな
い／二つの大問題と一つの希望

あとがき 嘘と孤独とテクノロジー

まえがき

宇宙の中であなたが確実に改善することができる一角がある。それはあなた自身だ。

——オルダス・ハクスリー

「利己性」「利他性」「社会性」

哲学者であり経済学者だったアダム・スミス（1723-1790）は、『国富論』（1776年）の中で「すべてはわれわれのもので、他人には何も与えない、というのが人類の支配者たちの卑劣な行動原則であるようだ」（第3編第4章）と人間の「利己性」について述べています。

一方でスミスは、「人間は利己的であるかもしれないが、他の人たちの幸せに気を配り、必要な援助をするという性質を明らかにもっているようだ。相手が喜ぶのを見ると」と以外に、まったく見返りのない場合であっても」と人間の「利他性」について『道徳感情論』（1759年）の書き出しで語っていています。

人類が示すこの「利己性」と「利他性」そして「社会性」は、一体どこから来ているのでしょうか。

生物の世界では、たとえば個々のアリは非常に単純な生物ですが、それらが何千と集まって形成されるアリのコロニー（集団）は、優れたリーダーがいるわけでもないのに、素晴らしい集合知能を発揮します。魚の群れや鳥の群れも、リーダーがいけないのに、全体があたかも一つの生物のごとく急激に方向転換したりスピードを変えて移動したりします。また人間の脳も、個々の神経細胞は電位変化を伝達するという単調なタスクを担っているだけなのに、何百億という数の神経細胞が集まると、「感情」や「意識」や「自己」や「知能」といった驚くほど複雑な現象が出てきます。

集合体はその構成要素とはまったく異なる性質を示す場合、この特性は「創発 emergence」されたものと呼ばれています。

物理学の分野でも、たとえば、ダイヤモンドと鉛筆の芯は同じ炭素原子からできていますが、まったく異なる特性を示しますし、水の場合も、氷、雪、水蒸気など、同じ分子からできているにもかかわらず、まったく異なる特性を「創発」します。特定の物質が超低温に冷却されて起こる超電導（電気抵抗がゼロになる）現象も、絶縁体がなぜ急に超電導物質になるのか、物質の構成要素を調べただけではわかりません。

人間の場合、人数が多くなると、「企業」や「町」や「国家」といった集団としての新たな特質が現れてきます。たとえば、個人的には誰も戦争などしたくないのに、集団になると強い暴力性が出てくるのはなぜなのか。経済学でも「合成の誤謬 fallacy of composition」と言われて、個々人レベルのミクロ状況ではうまく機能することも、国家全体といったマクロ状況では該当しないことがよく知られています。

世界各地でポピュリズムやナショナリズムが台頭している今日、今回インタビューした世界的な叡智5人は、加速度的な速さで変化していく不確実な社会に生きるわれわれに、「集合知能」や「集合暴力」や「集合利他性」などが、どのように「創発」され、インターネット社会はどのような方向に向かっていくのか、インターネットは新たなファシズム

の温床となるのか、といった疑問に対して、斬新な視点や大局観というものを提示してく
れます。

——エドワード・O・ウィルソンは、2度のピューリッツア賞を受賞した生物学者／昆虫
学者で、アリ研究の世界第一人者であると同時に、「社会生物学」や「進化生物学」分野
の創設者であり、生物多様性ならびにエコロジー研究の泰斗たいとでもあります。「利己性」と
「利他性」と「社会性」についての鋭い考察を提供し、人類が「石器時代の感情と神のよ
うなテクノロジーをもつ」ことの矛盾からあらゆる問題が発生していると言います。

——ティモシー・スナイダーは、気鋭の歴史家であり、冷戦時代に「鉄のカーテン」でブ
ロックされていた東欧側の膨大な資料に基づいて、新しいホロコースト史をまとめ、人類
の暴力のメカニズムを明かして、世界中に衝撃を与えました。インターネットを介したフ
アシズムの台頭を避けるためには「真実」と「知識」と「組織」が大事で、民主主義は
「法の支配」のもとに不完全さと多様性を許容するから、社会が次第に安定していくこと
ができるのだと。

——ダニエル・C・デネットは、哲学者であり認知科学者で、長年にわたって「意識」や「自由意志」の問題を研究してきて、社会は「理解していないけれど能力がある」現象、つまり「創発された集合知能」で回っていると言います。システムが巨大化したために情報寡占企業はもはやネットワークを制御できなくなっており、「プライバシー」がいかに大事かを指摘します。

——ステイブ・ピンカーは、認知心理学者で、大方の認識に反して、世界から暴力は確実に減少しつつあり生存条件も向上し、人類は着実に進歩してきていることを膨大なデータをもとに検証しています。もはや「一民族一国家」は成り立たないが、かといって将来人類が一つの世界政府のもとにまとまるとは思えないとも。また親が子どもに与える影響はごくわずかしかないという指摘も、驚くと同時にちよつと安堵するような。

——ノーム・チョムスキーは、言語学者にして哲学者であり政治学者でもあります。アメリカの帝国主義外交や新自由主義政策を厳しく批判し、大きな経済格差をもたらした元凶

である新自由主義が、今後新たなファシズムの台頭につながると警鐘を鳴らしています。

アツと驚く熱血物語もあります。ウイルソンとステイーブン・ジェイ・グールド（進化生物学、1941-2002）との「社会生物学」大論争、ウイルソンとジェームズ・ワトソン（DNA構造解析に成功）との「進化生物学」対「分子生物学」闘争、ウイルソンとリチャード・ドーキンス（進化生物学）の進化論争などに加えて、教育の基礎は「練習と訓練だ」と言うデネットに対して、「好奇心と情熱」だとするウイルソンが対決。「知識と思考法」の両方必要だとするピンカーが仲裁を。

さらにテクノロジーの発達によって「人類が己の遺伝的未来を自らの手で決定していくような『意図的進化』の時代になる」と言うウイルソンに対して、「『新たな創造説』など近視眼的で、世界がどれほど複雑なのかまったく把握していない」と真っ向から反論するデネット、「テクノロジーは単なる道具にすぎないのであって、人間の本质は変わらない」と言うチョムスキーなど、人類の将来についても意見が分かれます。

行きすぎた新自由主義とグローバリゼーションがもたらす、権威主義への傾斜と「法の支配」への軽視が、インターネットを介した新たなファシズムの台頭を許すのではないか

という強い懸念がくり返し出てくる一方、ピンカーは、人間の「理性」や「共感力」や「問題解決能力」を中心とする人類の叡智、とくに集合的叡智というものに高い信頼を置いていて、思わずポジティブな気持ちにさせられます。彼の「人間の本性」についての話には、男女の攻撃性の違いやビートルズの「エリナー・リグビー」まで出てきて、実にカラフル。

「悪徳の凡庸さ」という言葉を使って、「最大の暴力は『考える』ことをせずに素直に指示に従ってしまう善良な一般人によって行われる」と指摘したのは政治理論家ハンナ・アーレント（1906-1975）でしたが、これら5人の叡智たちが提供する刺激的な視点が、わずかでも考える糸口となればとの思いでインタビューをまとめました。

なお各章のイントロとインタビュー、並びにその翻訳と注を含む編集の文責は筆者にあります。

吉成真由美

嘘と孤独とテクノロジー 知の巨人に聞く

吉成真由美・編

エドワード・O・ウィルソン・著

ティモシー・スナイダー・著

ダニエル・デネット・著

スティーブン・ピンカー・著

ノーム・チョムスキー・著

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：本体 940円 + 税

発売日：2020年4月7日

ISBN：978-4-7976-8051-5

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)